

や頂上付近が整備され、嬉しいことに令和5年秋には春日山城CGがアプリで閲覧可能となり、春日山城跡が注目されるようになった。願わくは、一人でも多くの方々に実際に春日山城跡に足を運んで頂き、灰緑色の可愛らしい観音岩の質感と名前の謂れとなった三角形の小さな窪みをご自分の掌で眼でしっかりと確かめていただきたい。そして、生活世界での「もの・ひと・こと」との悲喜交々なかかりから生まれた身近な文化財について、その由来や歴史をあれこれ自由に想像する楽しみを子どもたちに伝えていきたいと思う今日この頃である。

参考文献

- 「観音の来た道」鎌田茂雄 著
講談社現代新書
「哲学のモノサシ」西研 著
河出文庫
日本列島プレート模式図
<http://ascii.jp/elem/000/000/455/455932/index-3.html>

柳田國男の『秋風帖』の旅

柳田國男・松岡家記念館 北山容子

はじめに

柳田國男は八十八年の生涯の中で、国外も含めて百回以上の旅をしました。その訪問先の多くは観光地ではない場所であり、國男はその土地の人々に「同情」して話を聞いたり、その土地を見てまわることを心がけていました。この「同情」は、調査を行う土地の人々の気持ちを思いやり、人々と同じ気持ちになる“という意味で、そうして行われた調査を基に、数多くの新聞・雑誌への寄稿文や著書が生み出されました。

國男が旅への決意を固めたのは十歳のときでした。山遊びの一行に連れられて故郷辻川の東にある日光寺山に登ったときに、瀬戸内海を見て「出世をせねばならぬ。そうして方々の海を見てあるこう」（『海女部史のエチュウド』『文芸春秋』四巻五号）と決意し、学生時代から晩年まで様々な場所を訪れています。その中でも大正九年（一九二〇）六月～大正十年（一九二一）二月の間は、北は青森県から南は沖縄県の石垣島まで、国内を縦横無尽に旅をしてまわりま

した。

『秋風帖』とは

柳田國男・松岡家記念館では、この時期の旅に注目して「柳田國男の旅」秋風帖・雪国の春・海南小記」と題して秋季企画展を開催しました。「大正九年は私一箇の為に、最も記念すべき旅行の年であった。」（『秋風帖』序）と記すとおり、六月の佐渡島を皮切りに、八月には東北地方、十月には東海・近畿・中国地方、十二月に九州・沖縄地方の旅に出かけています。そして、大正十四年（一九二五）には九州・沖縄地方の旅をまとめた『海南小記』、昭和三年（一九二八）には東北地方の旅をまとめた『雪国の春』、昭和七年（一九三二）には佐渡島と東海・近畿・中国地方の旅をまとめた『秋風帖』を出版しており、この三冊は、國男の代表的な紀行文です。國男は、このうち『秋風帖』のことを、他の二冊の時よりも旅の日程が短く、記した文章の量も少ないからでしょうか「大正九年の三つの旅行のうち、一ばん省みられなかった第二の紀行」（『方



『秋風帖』梓書房 昭和七年

言と昔他』解題』『定本柳田國男集第二十三巻』）としています。
『秋風帖』には、次の文章が収録されています。

- ・ 秋風帖（『東京朝日新聞』大正九年／『文芸春秋』大正十五年）
- ・ 秋の山のスケッチ（『民族』第一卷第一号、大正十四年）
- ・ 向小多良（原題「小さな手帖から」『同人』第三五、大正八年）
- ・ 木曾より五箇山へ（原題「旅日記」『文章世界』第四卷第一一、明治四十二年）
- ・ 佐渡一巡記（『旅と伝説』第五年十月号、昭和七年）
- ・ 佐渡の海府（『歴史と地理』第六卷第二号・第三号、大正九年）
- ・ 熊野路の現状（『郷土研究』第一卷第一二号、大正三年）

・峠に関する二三の考察（『太陽』
第一六巻第三号、明治四十三年）

このうち、「佐渡の海府」「佐渡一巡記」が佐渡島の旅を、「秋風帖」「秋の山のスケッチ」が東海・近畿・中国地方の旅のうち、東海地方のことを記したものです。その中で「秋風帖」は、國男が静岡県・愛知県の道中で見聞きしたことや自身の思いを書き記しては、旅先から東京朝日新聞へ送ったものが、十月二十六日から十一月十七日の間に十九回にわたって新聞に連載されるという形で発表されました。その後、昭和七年に『秋風帖』という書籍として出版される際には、連載第六回目の「有車階級」は除外され、大正十五年（一九二六）出版の『文芸春秋』に掲載された「杉平と松平」が「馬の仕合吉」と「還らざりし人」の間に追加され、全十五節に再構成されています。

旅の前夜

國男は明治三十三年（一九〇〇）に東京帝国大学を卒業後、現在の農

	掲載日	タイトル
1	10月26日	御祭の香（3回）
2	10月27日	
3	10月28日	
4	10月29日	山から海へ
5	10月30日	武器か護符か
6	10月31日	有車階級
7	11月3日	出来合の文明
8	11月4日	野の灯山の雲（2回）
9	11月5日	
10	11月6日	御恩制度
11	11月7日	狼去狸来
12	11月8日	巢山越え
13	11月9日	屋根の話
14	11月10日	ポンの行方
15	11月11日	馬の仕合吉
16	11月14日	還らざりし人（2回）
17	11月15日	
18	11月16日	ブシュマンまで
19	11月17日	茂れ松山

「秋風帖」タイトル一覧

林水産省と経済産業省の前身である農商務省の官僚として働き始めます。その後は法制局参事官などの職を経て、大正三年（一九一四）には貴族院書記官長となり、官僚として順調にキャリアを積んでいました。しかし、時間に追われることが多く、自由に出る環境に身を置きたいと考えるようになりました。そしてついに大正八年（一九一九）十二月に貴族院書記官長を辞職し、官僚としての生活に終止符を打ちました。

これについては「貴族院書記官長でありながら、十分な諒解もとらないで、長い大陸旅行をしたことが非常に私の人望を害してしまった。（中略）その翌年にも、私は同じようなことをしてしまった」（『故郷七十年』朝日新聞記者となる）ことで、貴族院議長徳川家達との関係が悪化し

たことが原因の一つといわれています。

辞職後「再び役人になる気持はなかったが、将来は何でもいい、旅行生活が自由に出来る職業がよろうと思った。それには新聞しかない」（同前）と考えていた矢先、東京朝

日新聞編集局長の安藤正純に入社を勧誘されました。三年間は国内と海外を自由に旅行させてもらうことを入社条件として提示し、社長の村山龍平が承諾したため、まずは客員として入社することが決まりました。しかし、貴族院書記官長を辞職してすぐに入社しては、計画的に辞職したと思われと考え、正式な入社は

大正九年八月とし、それまでは国内を自由に歩き回ることにしました。

佐渡島の旅

國男がまず行き先に選んだのは佐

渡島でした。大正九年六月十六日に新潟の港から佐渡島の両津の港に渡ると、偶然町の祭の日であったため、鬼太鼓や神楽を見物しました。翌日も町を見てまわりながら浜へ行くと、一艘の小舟が島の北の鷺崎へ行くというので急遽乗り込み、鷺崎の旧家木村家で一泊しました。その後は、島を反時計回りに一周する中で、島内の霊場を巡っていた島道者の五人組と意気投合し、荷物持ちと島の案内を引き受けてもらいました。その道中、彼らから、佐渡では仏堂の守りをする僧を「ロウソウ」と呼ぶことや、ある家の門に立ったロウソウの滑稽話など、土地の人々でなければ知らない話を聞き取りました。

相川で五人と別れた後は、人力車や船で島の南を見てまわり、両津に戻ります。さらに島の中央部の村を訪れ、三兄・井上通泰の友人の川辺時三に周辺で最も古いと言われる民家を案内してもらったり、神話学者の高木敏雄とともに國男が創刊した民俗研究雑誌『郷土研究』の寄稿者であった、茅原鉄蔵と会いました。國男は茅原のことを『郷土研究』へ送られてくる原稿などから、気難しい人だろうと思っていました。しかし、実際に会ってみると、七十過ぎでも壮年のようにハキハキと話し、

受け答えが明敏な人物でした。國男は、これまで茅原と文章のやりとりをするだけで終わっていたことを後悔し、自分から出向き、交流をしていろいろ教えて貰うべきであったと後に記しています。その後は再び両津に戻り、六月二十三日には新潟の港に渡りました。

新潟に戻った後は県立図書館で、『佐渡志』に記された、佐渡島に椰子の実が流れ着いた記事を読んでいます。

余談ですが、國男と椰子の実の話で有名なのは、大学生だった明治三十一年（一八九八）に愛知県の伊良湖岬に旅行した際に、海岸に椰子の実が流れ着いているのを見たというものです。後にその話を友人の島崎藤村にしたことが「椰子の実」の詩が作られるきっかけになりました。國男はその旅から二十二年後のこの旅で、太平洋側の伊良湖岬だけでなく日本海側の佐渡島にも椰子の実がある南方の国や島々と日本との関わりについて、さらに関心を深めました。

國男はこの旅の十二年後の昭和七年、佐渡の旅について振り返り、また旅に対する自身の考えを「佐渡へ来た以上は誰でも見物に行かぬ者は

無いという場処を、十箇処ほど教えてもらって私は皆残して来た。（中略）誰も

が省みなかった処にこそ、我々の知りたい事実は遺って居る。

旅の学問には人の顔、何でも無い物ごし物いいなどが、本に書いて無いから自分で行って経験しなければならぬ。」（『旅と伝説』佐渡一巡記）

と記しています。旅をするのなら、景勝地や土産を目当てにするのではなく、その土地に住む人々のありのままの姿を見てまわり、語り合うという経験をしなければならぬ、という思いを、五人の島道者や茅原との交流の中でより強くしたのです。



『旅と伝説』第五年十月号

番号	地名	内容
①	両津	6月16日 新潟から両津港に着く 郡会議員の甲斐亀壽に、両尾の宇賀神社の話を聞く 祭りで山車や鬼太鼓、神楽を見る
②	鷺崎	6月17日 両津の浜から小型の発動機船に乗り鷺崎に着く 旧家の木村家に泊まる
③	弾崎	6月18日 赤玉から来た巡礼者5人と同道し弾崎灯台に着く
④	願	巡礼者の霊場、願の養の河原を見る
⑤	真更川	鷺島の里を通り真更川に着く
⑥	石名	関村・矢柄村を通り石名に着く 清水寺のイチヨウの木を見る
⑦	入川	この日、鷺崎から外海府を36kmほど歩き、入川に着く 旧家の服部家に泊まる
⑧	姫津	6月19日 高いところから姫津の町を眺める
⑨	相川	高田屋旅館に泊まる 同道していた5人と別れる
⑩	小木	6月20日 相川から人力車で沢根・河原田・新町・田切須・小比叡を通り小木に着く 喜八屋に泊まる
⑪	松ヶ崎	6月21日 発動機船で松ヶ崎に着く 船頭を2人雇い、和船で赤玉の沖を通り両津に着く
⑫	中興	6月22日 井上通泰の知人の川辺氏に、周辺で最も古いといわれている民家を案内してもらう 農学者で『郷土研究』にも寄稿していた茅原鉄蔵に会う
⑬	新穂	新穂を通り両津に着く 6月23日 両津港から新潟に着く



佐渡島の旅の主な訪問地



東海・近畿・中国地方の旅

佐渡島から帰った國男が次に選んだ旅先は東北地方でした。八月二日に東京を出発して仙台に着き、そこから東北地方を見てまわり、東京には九月二十二日に戻りましたが、それからわずかに二十日ほどで、今度は東海地方の旅に出かけています。後に、この旅について「これは私の最も自由なる旅行の一つであった。前にも好んで路程を変えて見ることはあったが、此時ばかりは始から計画というものが無かった。駿州の焼津で汽車を降りてから、成るべく鉄道と筋かいにあるいて見ようとして大井と天竜との間を幾日かうろついた。」(『秋風帖』序)と記しています。

この旅は十月十三日に東京を出発して静岡県から始まり、広島や芸予諸島までまわって十一月二十一日で終わりましたが、新聞に掲載された「秋風帖」の記事は、静岡県と愛知県で終わっています。その中で國男が新聞の読者に紹介したのは、景勝地などではなく彼の旅に対する考え方に則って見聞きして記された、その土地の人々の生活に踏み込んだありのままの姿でした。

十月二十九日の記事では、わずかな期間で大きく姿を変えてしまった

静岡県の焼津について記しています。旅行に際して用意していた、三十年前の陸軍地図がほとんど役に立たないほど開発が進んでおり、人家や防波堤、松の木に至るまで古い物がほとんど無く、昔の文物を愛したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が、なぜこの焼津を愛したのか自身には理解できない、と思うほどに変化していました。そして、人や産業について鈴木辰次郎町長に話を聞き、昔は発動機船の練習に來た他の浜の若者は、婚姻関係を結んだり人情で繋ぎ止めて焼津の浜で働いて貰っていたが、最近練習に來る人は、練習が終われば故郷に帰ってしまうので、今は山間部の若者を誘ってきて働いて貰っているということを知りました。この話に対しては「折角思い切って出て來た若い衆を、再び寒い山奥へ稗(ひょう)を食(く)べに、戻さぬようにしたいものだ。」(『秋風帖』山から海へ)と記しています。

さらに十月三十日の記事では、第一次世界大戦による景気の大きな変動によって、大都市が抱えた失業者の問題について記しています。訪れた当時、静岡県の浜松では「口に離れた職工たちを国に還す為、町の有力者が旅費の金を、慈善家から集めて居ると云う噂である。」(『秋風帖』

武器か護符か)と、浜松の政治家たち

が、職の無い出稼ぎ労働者に旅費を渡して故郷へ帰らせようとしていることを知りました。それに対して「旅費も無いような貧乏な家族に、還って來たぞやれ楽やと云うような結構な故郷が有ろうとは一寸信ぜられぬ。送還は果して彼等の救済であるや否や。或はそんな事をして只問題を片付けて置くのでは無いか。(中略)今に全国で一斉に此政策を採用する時の事を考えると、実にぞっとしてしまふ。」(同前)と、そのような人に旅費を渡して帰らせたとところで、結局故郷でも仕事に就けずに困ること、その場しのぎで根本的な解決にはなっていないこと、この政策を全国の大都市が始めれば国全体が大変なことになってしまうと述べ、「世の有力者たる者は深く我が無力を覺り、捨て置き難い偉大な問題を捨て置かれた今度の悲しい経験を忘れないで、権能は有っても智慮の無い者には縋り附かず、此次は解決し得そうな者を働かせる工夫をする」とだ。愚直で昔風な職工が得られて、好い按配だと思ふ如き鼻元思案は、未来の工業市としては第一に撤回せねばなるまい。」(同前)と、政治家たちは政策の失敗を反省し、考え方を改めて次に生かすべきであると厳

しく批判しています。

また、地元の知られざる偉人について紹介しており、十一月十四・十五日の記事では、愛知県の岡崎出身といわれる江戸時代の旅行家、菅江真澄(一七五四―一八二九)について記しています。菅江真澄はその生涯の中で信州や東北地方を何度も旅し、多くの日記や紀行文を残しました。國男は菅江真澄のことを旅の先達として尊敬しており、岡崎に着いてから、彼の足跡を探して方々を訪ね歩いています。結局足跡は見つかりませんでした。「菅江真澄の足跡は消えて居たけれども、彼を生み育てた故郷の土の香には、又改めて大いなる親しみを持つことが出來たのであった。」(『秋風帖』序)と、さらに菅江真澄への関心を強くしたことを記しています。昭和四年(一九二九)には、有志と共に菅江真澄の紀行文『真澄遊覧記』の復刻本を出版する「真澄遊覧記刊行会」を発足しています。

おわりに

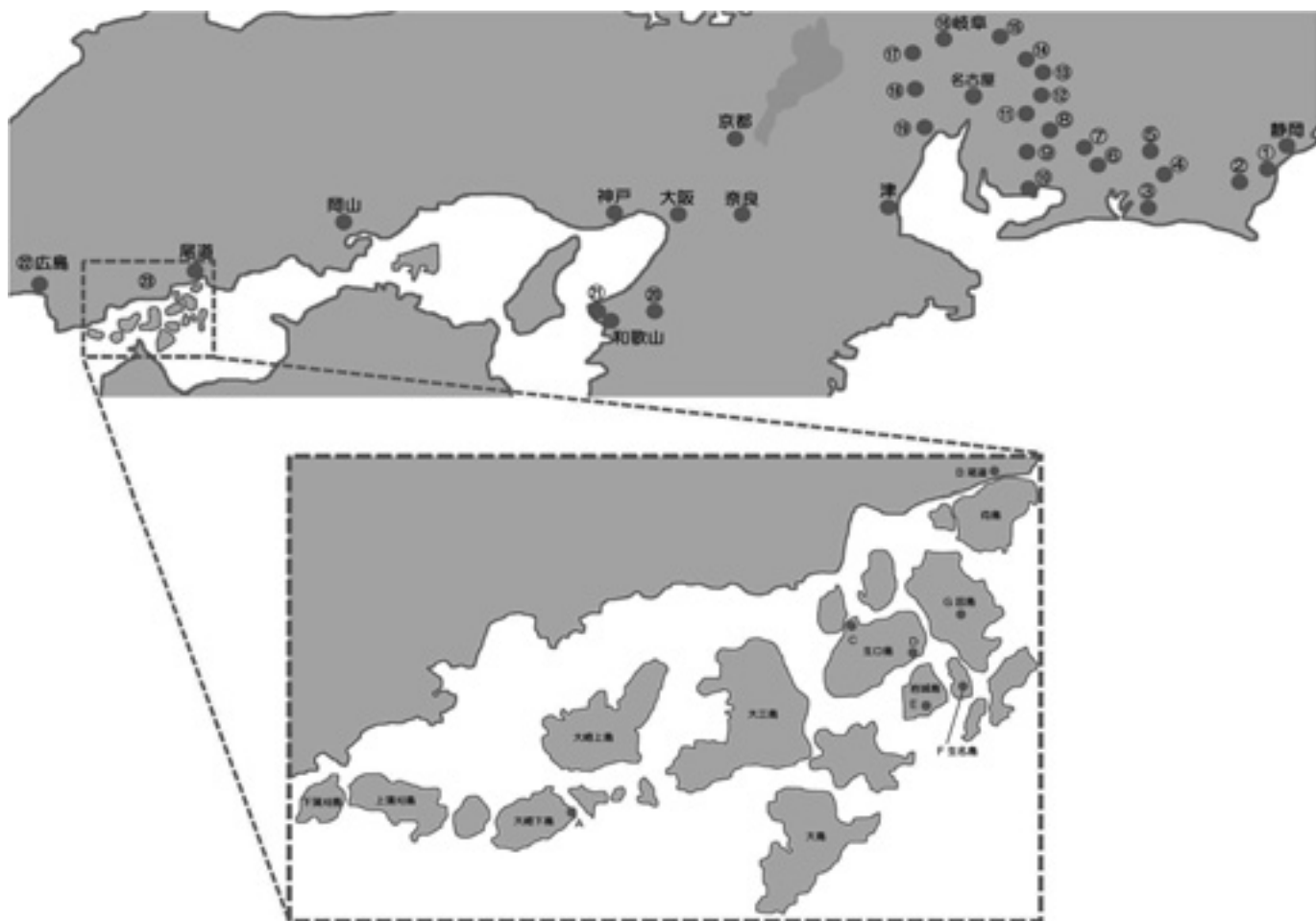
國男は、旅について「旅は一生のうちに見たいと思う処を、見尽してしまえばそれでよいというのは、単なる逸民の我欲に他ならぬ。」『秋風帖』序)と記しています。觀光地でただ非日常を味わい楽しむだけの

旅は、國男の考える旅では無かったのでしょう。また、紀行文についても「紀行の目的とする所は時世と共に変らなければならなかった。」（同前）と記しています。その土地を知らない人やその土地を知るだけの他所の人ではなく、その土地の住民こそが一番深い関心をもってくれる読者であるからこそ、住民が興味を持つようなものへと変わっていくべきだとも述べています。この序文が記されたのは昭和七年のことですが、國男は大正九年にはすでに、こうした考えをもって旅をし、紀行文を記していたようです。

柳田國男は、自身の学問にとって旅は非常に重要なものであると考えていましたが、今回はその中のほんの一部分をご紹介します。二〇二五年は柳田國男の生誕百五十年となる年です。この記念すべき年をきっかけに柳田國男という人物に少しでも関心を持っていただけますと幸いです。

参考文献

- 『柳田國男全集第六卷』筑摩書房（一九九八）
- 『柳田國男全集別巻二』筑摩書房（二〇一九）
- 『定本柳田國男集第一巻（新装版）』筑摩書房（一九六八）
- 『定本柳田國男集第二十三巻（新装版）』筑摩書房（一九七〇）
- 『柳田國男伝』三一書房（一九八八）
- 『故郷七十年』柳田國男著 神戸新聞総合出版センター（一九八九）



東海・近畿・中国地方の主な訪問地

番号	地名	内容
①	やいづ 焼津	かつては発動機船の練習に來た他郡の青年を焼津の港にとどめて働いてもらっていたが、最近では山村の青年を招いているという話を鈴木辰次郎町長から聞く
②	しまだ 島田	大井神社の島田大祭（帯まつり）を見る
③	はままつ 浜松	磐田と引佐の境を尾根づたいに歩き、八名郡（現新城市）に行くことを決める 浜松で補習学校をしている中村修二に同行してもらい、浜松を出発する
④	ふだまた 二俣	宿帳を見て、遠方の商人に混じり、近隣の山中に住む人が多く泊まっていることに気づく
⑤	あたらご・くま 阿多古・熊	熊村辺りまで中村修二に同行してもらい、別れる
⑥	しんしろ 新城	熊から栄山を通り大野に出て長篠まで歩き、豊川鉄道に乗り新城に着く 建築学者で民俗学者の今和次郎が合流する
⑦	つくで 作手・杉平	御前石峠の頂上から伊勢湾・浜名湖・豊橋を見る 茅葺きの家があるのを見る ポン（サンカ）が来ているのを見る
⑧	しもやま・まつでいら 下山・松平	下山で、大正8年正月に建立された馬頭観音像を見る 徳川家康の先祖が田を寄進した、松平の高月院に行く
⑨	おかざき 岡崎	九久平・岩津を通り岡崎に着く 菅生神社で菅江真澄の話をする
⑩	はづ 幡豆	明治31年（1898）伊良湖に旅行した際、船から眺めた幡豆に着く 今和次郎と別れる
⑪	こもち 拳母	俳人の岡田撫琴に自動車で岡崎から拳母まで送ってもらう
⑫	きなげ 猿投・飯野	教師で郷土史家の小栗鉄次郎に猿投神社を案内してもらう 夜に飯野の旅籠屋に着く
⑬	かきの 柿野	飯野の経師屋の男に案内を頼み、三国山の東を通って柿野に着く 飯野から柿野にかけて、ツグミを捕まえる罠が多く張られているのを見る
⑭	たじみ 多治見	陶磁器に使用する石を工場へ運ぶ荷馬車が絶え間なく走る道を通り、多治見に着く
⑮	おおた 太田	自動車で木曽川に架かる兼山橋を渡り、太田に着く 考古学者の林魁一が自宅の庭の柿をもって國男が泊まる大沢屋に來たため、夜遅くまで話をする
⑯	ぎふ 岐阜	林魁一の柿を土産にもらい、太田から自動車岐阜に着く
⑰	おおがき 大垣	岐阜から汽車に乗り、大垣に着く 柿の品評会を見る
⑱	かいづ 海津	自動車で揖斐川右岸の新しい川除堤（堤防）を見ながら海津郡に着く 持っていた地図が役に立たないほど、河川工事のため交通網が変化しているのに驚く
⑲	くわな 桑名	船津屋に泊まる 紀州の加太浦を見たいと思い、さらに淡路に行くことを決める
⑳	こなわでら 粉河寺	汽車に乗り、伊賀と大和を素通りして粉河寺に着く 郷土史家で粉河寺僧侶の逸木盛照を訪ねるが留守のため会えず
㉑	かた 加太	大坂屋に泊まる 加太の淡島神社に着く 淡路島へ渡る船がないため瀬戸内の方へ行くことを決める
㉒	ひろしま 広島・宇品島	大阪に出て、夕方に下りの汽車に乗る 汽車内で一夜を明かし、広島に着く 出川旅館に泊まる 広島から宇品島へ行き、乗合船を探す
㉓	おのみち 尾道・芸予諸島	いくつかの島に寄り、（A）大崎下島の御手洗に着く （B）尾道に着き、船に乗って（C）生口島瀬戸田に着く 峰を越えて島の南の（D）原で小舟を見つける 対岸の（E）岩城島に着き、案内無しに島の山道をめぐる （F）生名島・（G）因島に渡り、乗合船で（B）尾道に着く